

インドネシアの歌 (3)

ラグラグ会愛唱歌編

ラグラグ会は インドネシア人以上?

日本のある歌集で Rayuan Pulau Kelapa をインドネシア民謡として取り上げているのを見つけた。同曲は Lagu Rakyat (または Nasional) とでもいうジャンルに入るが、この手で行くと Bengawan Solo も Nyiur Hijau も民謡のジャンルに入れてもおかしくない。ところで、インドネシアの国の広さというか、文化の多様さか、今の若い世代は自分の出身地以外の地方の民謡をあまり知らない。日本でも似たようなものだが。

ラグラグ会にとってインドネシア民謡は最もよく歌うジャンルであるが、もう1つの重要なジャンルに所謂ノスタルジア曲がある。上述の3曲も含め、インドネシア独立運動以前から歌われてきたスタンブル、ランガム、クロンチョン(以上いずれも音楽上の分類)など、日本の感覚でいう「ナツメロ」がそれである。

このノスタルジア曲は一部の有名曲、たとえば Widri, Jembatan Merah, Selendang Sutra, Sepasang Mata Bola などを除くと今の若い世代のインドネシア人は知らない人が多い。ジャカルタのチキニ通りに TIM(Taman Ismail Marzuki)という音楽公園があるが、I.Marzuki という戦前戦中派の大作曲家のことも忘れられようとしている。

とまあ、何を言いたいかというと、我々ラグラグ会は民謡とノスタルジックな曲を好んで歌っているのであるが、インドネシアの若手外交官がラグラグ会のパーティでそのような歌を聴いて、自分は知らないが「小さい時お祖母さんやお母さんが歌っていたような気がする...」と。あるパーティで私が前述 Marzuki 作曲のある歌を歌おうとしたら、インドネシアの歌なら何でも伴奏できると思っていた伴奏者がそんな歌知らないと言った。「なんだ、知らないのか?」と思ったが、こちらが古すぎたなと後でこっそり反省したものだ。確かに古い、いかに時間が経とうとも名曲は名曲である。インドネシア人にも忘れられようとしている名曲に惚れ込んでいるのがラグラグ会なのであり、これは誰がなんと



おうとも今後も変わらぬであろう。インドネシアと日本の文化が似かよっているのか、インドネシアの歌は、一部の超エスニックなジャワやバリの歌を除いて、特にノスタルジア曲は日本人の心に自然に受け入れられるところがある。これが、我がラグラグ会にインドネシア駐在経験者以外の方々がメンバーとして増えていっている大きな理由であると思っている。

1960~70年代に歌声喫茶(ビヤガーデン)が流行り、ビールを飲みながら大声で歌ったものだが、当時の歌が既にナツメロとなっている日本。ところが、最近シルバ―世代に流行りかけてきたのが、この歌声喫茶であるという。さもあらんと思うのは私1人ではないだろう。今、世界中で大流行のカラオケとは、また違う歌の世界なのだ。この歌声喫茶ではなんとナツメロが主役。現在のポップ類、16ビートの舌を噛みそうな歌と異なり、のんびりと、のどを聴かせるでなく、自分の好きなように他の人と一緒に大声で歌う。歌の上手下手に関係なく、家でこっそり特訓する必要もなく、ほんのわずかな費用で身体だけ参加させて楽しむもので、将に薬要らずの医者泣かせの健康社交クラブだ。

実はラグラグ会はインドネシアの民謡とナツメロを主役とした、将にこの歌声喫茶なのである。広いインドネシアの全地域から集めた数多の民謡群、現代インドネシアから消えなんとする豊富なナツメロを後生大事に守るといふより、むしろそのストックを益々広げようとしている。インドネシア音楽博物館たる存在であると豪語するのは、ちょっと面映いが、心意気はそんなところ。

若者の歌は今、全世界共通で身体全体で感じて歌っているように思われる。タムタムが強烈なドラムやベースのビートに変わったもの、日々の心の内をBGM風の伴奏にのせて詩を詠っているもの...。ただ、将来ずっと残るのは、やはり美しいメロディだと思う。そして、それがナツメロになる。ということは、ナツメロは年を経るとともにどんどん増えていくわけである。

ラグラグ会員がインドネシア人よりたくさんの民謡を知っている、彼らの知らない歌までも。これは素晴らしいことだと自負しています。(渡辺重視)